仏教

藤原　敦

❑ 定番サイトの動向

ここ1、2年、SAT[1]やCBETA、INBUDS[2]などの定番サイトは、以前の活発な時期と比較してその動きが落ち着いて来ている。今後の着実な成長を期待したい。

●CBETA：続蔵経の公開

http://www.cbeta.org/

2005年11月に新纂日本続蔵経の1～4巻が、12月には5、7～10巻、2006年7月には、11～16巻が相次いで公開された。これにより、続蔵経については1～5、7～16、55～85巻が公開されたことになる。以前に告知された公開予定とは、若干遅れているようであるが、近年中に全巻が公開されるのは間違いないであろう。

❑ 所蔵品の公開

2000年以降、博物館や美術館は、e国宝[3]や文化遺産オンライン[4]などに見られるように、所蔵品情報の公開や他館との共有化を積極的に進めている。

そうした中、2006年7月に東京国立博物館にて公開研究会「博物館情報学の構築」が開催され[5]、経過報告が行われた。参加した筆者の見解としては、技術が先行している感がしないでもなかったが、今後、急速的な発展が予想される分野であり、注視していきたい。

●東京国立博物館：館蔵品ギャラリー

http://www.tnm.jp/jp/gallery/

こちらは、東京国立博物館が所蔵する文化財のデータベースである。「竹生島経」や天台座主慈円の「願文」など仏教関係の文化財を含む所蔵品の中から優美品約500点について紹介しているほか、各所蔵品の現在の展示状況についても説明している。

●奈良国立博物館：名品紹介

http://www.narahaku.go.jp/meihin/

こちらは、奈良国立博物館が所蔵する文化財のデータベースである。興福寺の旧境内という、博物館の所在地が影響しているのか、「紫紙金字金光明最勝王経」や「百万塔」など、他の国立博物館と比較して仏教関係の所蔵品が多い。

●京都国立博物館：収蔵品データベース

http://www.kyohaku.go.jp/jp/syuzou/

こちらは、京都国立博物館が収蔵する文化財のデータベースである。「明恵上人歌集」や「円仁入唐求法目録」など、5,000点以上もの収蔵品に関する画像を閲覧することができる。

●九州国立博物館：収蔵品ギャラリー

http://www.kyuhaku.com/pr/

こちらは、2005年10月に開館した九州国立博物館が所蔵する文化財のデータベースである。まだ紹介数が少ないが、今後の展開に期待したい。

❑ シルクロード研究

仏教がインドから中央アジアを経て中国へと伝播する経路であったシルクロードに関する研究プロジェクトの1つとして、国立情報学研究所[6]が主催する「ディジタル・シルクロード・プロジェクト」[7]がある。同プロジェクトでは、主にこれまでに日本の研究機関が収集したシルクロードに関する文献、画像等のデジタル化、アーカイブ整備、公開等の活動を行っている。

図1　奈良国立博物館：名品紹介

図2 「東洋文庫所蔵」図像史料マルチメディアデータベース

●「東洋文庫所蔵」図像史料マルチメディアデータベース

http://dsr.nii.ac.jp/toyobunko/

同プロジェクトの1部門として「東洋文庫所蔵」図像史料マルチメディアデータベースがある。

ここでは、財団法人東洋文庫[8]が所蔵するシルクロードに関する貴重書53冊をデジタル化し、約7,000点もの画像を公開している。

公開されている画像は精度が非常に高く、人物画の装飾品の細部まで見ることが可能である。画像それ自体が貴重であることも踏まえると、仏教美術を研究する上で非常に有効なサイトである。

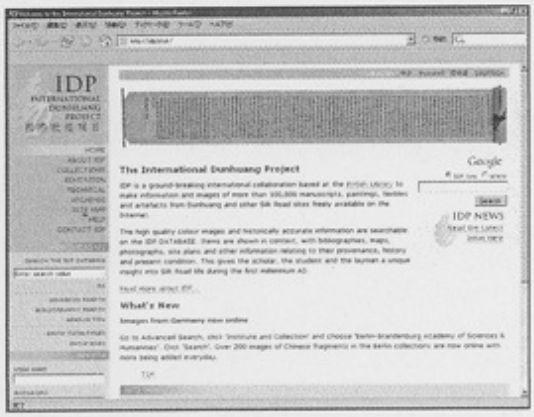
●ディジタル・シルクロード地名集

http://dsr.nii.ac.jp/geography/

同プロジェクトの1部門として、ディジタル・シルクロード地名集がある。

ここでは、これまた同プロジェクトの1部門である「シルクロード用語集」[9]とGoogle Earth[10]とを連動させ、Google Earth上でシルクロード関係の地点をクリックすると、そこに関する「シルクロード用語集」の当該項目を表示させ、リンクによって「写真でつなぐシルクロード」[11]等、更なる情報提供先へと閲覧者を誘導させる試みを行っている。

図3 国際敦煌項目



❑ 敦煌文献

敦煌文献は1900年の発見以降、各国の探検隊によって中国国外に持ち出され、現在、各国の図書館、美術館等に分散保管されており、これまで横断的に研究を行うことが困難であったが、近年、各国の資料のマイクロフィルム化、書籍化、デジタル化が進み、横断的に研究を行うことが可能となった。更に、ここ最近は各国の研究機関が協力して、資料の共有化、関連研究論文の収集を進めており、今後ますますその発展が注目される研究分野となっている。

●国際敦煌項目

http://idp.bl.uk/

国際敦煌項目（International Dunhuang Project）は、大英図書館と中国国家図書館を中心とする各国の研究機関が共同で運営する敦煌文献研究サイトであり、各国がそれぞれ所蔵する敦煌文献、その他発掘品、現地の景観など、10万点余りの画像を閲覧することができる。

なお、各言語によって、それぞれサーバが異なっており、日本語は龍谷大学（http://idp.afc.ryukoku.ac.jp/）が担当している。

●敦煌学研究論著目録資料庫

http://ccs.ncl.edu.tw/topic_3.html

敦煌学研究論著目録資料庫は、台湾の「漢学研究中心」の「典蔵目録及資料庫」にある敦煌に関係する研究論文の検索データベースであり、1997年に刊行された紙の「敦煌学研究論著目録」を基に、中正大学の鄭阿財、朱鳳玉両氏を中心とするメンバーによって公開されている。2006年7月現在、12,778点の論文を検索することができ、中国、台湾以外の地域の研究者の論文も検索可能である。

●敦煌吐魯番文

http://www.nlc.gov.cn/

敦煌吐魯番文は、中国国家図書館のデータベースの1つであり、国家図書館内の1部門である敦煌吐魯番

資料閲覧室[12]が所蔵する文献を中心に、中国国内外で刊行された敦煌・吐魯番に関する文献が検索できる。

具体的な検索方法については、国家図書館内の全体検索の際に、敦煌吐魯番文データベースを指定して検索することになる。

●『俄藏敦煌文獻』収載文献 Database

http://h0402.human.niigata-u.ac.jp/~dunhuang/doc/russiatop.htm

『俄藏敦煌文獻』収載文献 Database は、新潟大学敦煌研討班のプロジェクトの1つで、關尾史郎、玄幸子両氏によって作成された、ロシア科学アカデミー東洋学研究所サンクトペテルブルク支部が所蔵する敦煌文献に関するデータベースである。画像を閲覧することはできないが、各資料1点1点に付けられた番号、書籍の収録ページ数等が検索できる。

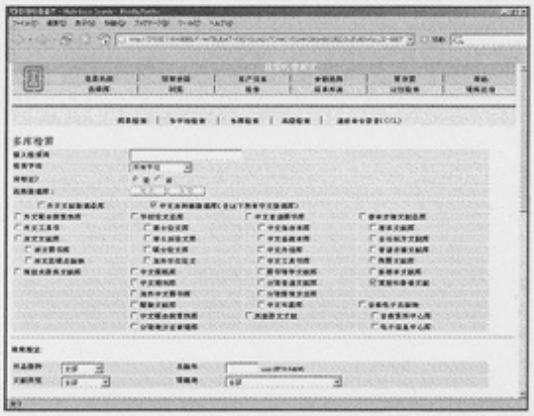


図4　中国国家図書館：敦煌吐魯番文

❑ 終わりに

全体的に、文献や画像の電子化については、一段落したように見える。特に、画像については、それを所蔵する国立の博物館・美術館が独立行政法人への移行に伴って、自己の存在意義を示すために広報活動の一環として所蔵品の電子化、公開を積極的に行ったため、急速に整備された。

今後は、それらを活用した研究が行われると共に、国際敦煌項目のように、共同で研究を行うことが主流になると思われる。

注

[1] SAT：http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~sat/

[2] INBUDS：http://www.inbuds.net/

[3] e国宝：http://www.emuseum.jp/

[4] 文化遺産オンライン：http://bunka.nii.ac.jp/

[5] 東京国立博物館情報アーカイブ（仮称）＞公開研究会「博物館情報学の構築」http://webarchives.tnm.jp/archives/

[6] 国立情報学研究所：http://www.nii.ac.jp/

[7] ディジタル・シルクロード・プロジェクト：http://dsr.nii.ac.jp/

[8] 東洋文庫：http://www.toyo-bunko.or.jp/

[9] ディジタル・シルクロード用語集：http://dsr.nii.ac.jp/term/

[10] Google Earth：http://earth.google.com/

[11] 写真でつなぐシルクロード：http://dsr.nii.ac.jp/photograph/

[12] 前述の国際敦煌項目の中国担当部署でもある。http://idp.nlc.gov.cn/

Wikipedia とは何か

藤原　敦

❑ はじめに

本稿では、今話題のオンライン百科事典 Wikipedia（ウィキペディア）[1]の概要を紹介すると共に[2]、その課題と将来について考察を行う。

❑ Wikipedia とは

Wikipedia とは、Wiki クローン[3]の1つである MediaWiki[4]を使用して共同で百科事典を作成するプロジェクトであり、アメリカの非営利団体、Wikimedia 財団[5]によって提供されている[6]。2006